

# ドン・ジュアン劇の登場人物の塑造

一之瀬 正 興

## はじめに

モリエールは多くの喜劇作品を残したが、初期の笑劇的喜劇やコメディ・ア・デラルテ的作品からいわゆる本格喜劇 *grande comédie* およびコメディ＝バレエにいたるまで、多くの先人の作品を利用している。個々の作品の一部が盗作・剽窃呼ばわりされて、敵方からの激しい攻撃にさらされたこともあった。しかし、本歌取りのようにギリシア・ローマの古典作品をふまえて作品を創作することは、古典演劇においてはごく普通の創作過程であり、当時非常に多くおこなわれていたことであった。ボワローは『詩学』の中で、「むしろ彼 [主人公] が自ら名を名のり、『私はオレステスだ』とか、『余はアガムノンだ』というほうが、多くの錯綜した異常なことで、心には何も訴えることがないまま耳を聳するよりもはるかに良いと思う。」<sup>(1)</sup>と述べている。もちろん、これは悲劇における主題の提示について述べたくだりであるが、いずれにしても西洋古典の作品の何に依拠しているかを堂々と示すことを奨めている。たとえば『コルネーユは『エディップ』においてディルセ姫を創案して『オイディプース王』を脚色したし、ラシーヌはアリシー姫をイポリートに添えることで新しい『フェードル』を創作した。<sup>(2)</sup>

モリエールの喜劇作品においても、たとえば『アンフィトリオン』や『守銭奴』のように当然ギリシア・ラテンに起源をもつ神話・伝説<sup>(3)</sup>に依拠したものもある。そんな中でも『ドン・ジュアン』は先行作品としては比較的新しい17世紀スペインのティルソ・デ・モリーナ『セヴィーリヤの色事師と石の招客』（以下『色事師』）<sup>(4)</sup>に端を発する先行のドン・ジュアン劇をふまえている。ドン・ファンはスペインで誕生し、やがてイタリアを経由してフランスに入り、ドリモンやヴィリエ<sup>(5)</sup>をへてモリエールに至り、その強烈な

個性をもった姿を見せる。しかもその後はヨーロッパ各地で、各国語で、時代を超えて多くのドン・ジュアンが誕生していった。その詳細はジャンダルム・ド・ベヴォットの大著<sup>(6)</sup>等で検証されている。それは演劇作品だけでなく、オペラ、小説、絵画等でも表現され、今日もわれわれを楽しませてくれる。中でもモーツアルトの『ドン・ジョヴァンニ』<sup>(7)</sup>は高い評判を取り、むしろ音楽の力もあって変わらぬ人気をかくしている。

ここではドン・ジュアン劇の嚆矢となるティルソの『色事師』の登場人物とモリエールの『ドン・ジュアン』のそれとを比較しながら、モリエールの作劇的戦術をとおして、モリエールのドン・ジュアン像の生成を演劇的效果の側面から検討する。つまりこれ以降の各国の、各時代の様々なドン・ジュアン像の原型となるドン・ジュアンがいかにして誕生できたのか、劇作法上の見地から規定しようとする試みである。

## 1. 『色事師』の登場人物

『色事師』を一言でいうなら、ドン・ファンのいくつもの女性誘惑・征服の悪行を暴き、最後は厚顔な色事師ドン・ファンも神の怒りに触れ地獄に堕ちるといふ、いわば勸善懲悪劇とされている。そこでは、悪事を重ねるドン・ファンの行く先々で次々に女たちが犠牲になっていく。舞台はナポリから始まるが、ドン・ファンが逃れて行く先々で誘惑事件が起こる。その女性誘惑の舞台を変えながら劇は進行する。

ティルソは、スペイン黄金時代の先輩ロペ・デ・ベーガのいわゆるバロック的作風を踏襲して「ロペの側に立って彼の演劇理論を弁護し、その作風と

理論に忠実な作品を数多く残している。」<sup>(1)</sup> のであるが、『色事師』もその系列に属す。ドン・ファンの女性征服の進行に合わせて舞台は展開していくのである。フランス古典主義演劇の法則、たとえば「三一一致の規則」等は全く気かけない奔放な場面展開、舞台情景が展開される。

ここではその物語を追いながら、ドン・ファンの犠牲になる4人の女性登場人物の原像に焦点を当てて見ていこう。その後で、ドン・ファンとドン・ジュアン、石像および下僕であるカタリノンとスガナレルの人物像の特色を比較検討してみよう。それは、モリエールの『ドン・ジュアン』における物語展開と人物像の塑造を、より対比的に明確にするために、少々細くなるが、必要な作業である。

## 1 イザベラ

開幕冒頭ドン・ファンは友人のオクタヴィオ公爵になりすまして、その恋人、女公爵イザベラを暗闇に乗じて犯す。暗闇を味方にしたとはいえ、どのような手管で王宮の一室でこのような信じがたい場面が出来たのか不明であるが、ドン・ファンの第一の戦果はこのように観客に提示される。いわゆる古典主義演劇理論でいう「真実らしさ」からいえば、暴力的な行為によらず見事に誑かされたイザベラ同様観客も茫然自失の状態である。身分の高い貴族の女性が、こともあろうに王宮の国王の真近において犯されるというのは前代未聞の不名誉に違いない。さて、事件発覚後、国王の命により衛兵を指揮して犯人を追ったのは伯父のドン・ペドロ・テノーリオであった。捕まえてみれば犯人は甥のドン・ファンであってみれば、その処置に窮する。ドン・ペドロはドン・ファンの言い訳に対して次のように言ってドン・ファンを糺弾している。この台詞は、観客に対するドン・ファンの素性説明にも

なっている。

「もうよい、みなまで言うな。(傍白 国王のお耳に届けばわしとて無事には済むまい。どうしてくれよう? なんとか知恵を絞ってこの重大事を切り抜けねばならん。) 卑劣な奴め、スペインで貴族の女性を無法極まりない裏切りに陥れておきながら<sup>(2)</sup> ナポリでもまたぞろやんごとなきご婦人を、こともあろうに王宮で狼藉に及んだのか? 天罰が下ればよい! カステイーリャから親父殿が貴様をナポリへ送ってよこしたが、白波の囀むイタリアの大地が貴様に陸地の端なりとも分けてくれたのは、そうやって貴様を受け入れてやれば感謝するかと期待してのことであった。しかるに何ぞ、やんごとなき婦人にかかわって父上の名誉を蔑ろにしているではないか! だが、いまはぐずぐずしておれん。どうするかよく考えろ。」(I)<sup>(3)</sup>

しかし肉親の情にほだされたドン・ペドロは、国王に対してオクタヴィオ公爵を犯人に仕立てて、甥の悪行を隠蔽する。騎士の作法にのっとり剣を差し出して許しを請うドン・フアンの見せかけのしおらしい態度に、伯父のドン・ペドロはすっかり騙されてしまったのだ。

イサベラは恋人オクタヴィオ公爵を犯人にされたとも知らず、国王に冷たく不明を誹られながらもオクタヴィオの救いを願って我慢するよりほかはなかった。

さらにドン・ペドロは、オクタヴィオに会いイサベラを辱めたかどで王命によって召し捕ると脅し、スペインへ逃げるようしむける。

## 2 ティスベア

ナポリ王国を逃れたドン・ファンと下僕カタリノンは、セヴィーリヤ王国に赴く途中難破してしまい、漁師娘ティスベアとその仲間たちに助けられる。ドン・ファンはここでも早速ティスベアに触手をのばす。一生懸命介抱して命を救ってくれた恩人を裏切り、貴族の身分をちらつかせたうえ結婚を餌に娘を誘惑する。ティスベアは身分違いを理由にさかんに固辞するが、ついに誑かされてしまう。これで劇中の第二の犯行は完了する。

結局裏切られてまんまと捨てられてしまったティスベアは、呪われた初夜を過ごした漁師小屋に火を放ち、発狂したように恋の女神に慈悲をもとめて泣く。

「[……] 男を侮っているといずれはしっぺ返しを食らうのが女の常。夫になると約束した騎士が、泊めてもらった恩義を踏みにじてわたしを騙した。まんまとわたしをペテンにかけ、手塩にかけて育てた馬を二頭、ご丁寧にもあいつにくれてやったので翼をつけてやったも同然、わたしをおもちゃにして逃げて行ってしまった。みんな、追いかけてちょうだい。いえ、かまうものですか、国王の御前に復讐を願って出てやる。  
[……]」(I)

漁師仲間の若者たちは卑怯者の騎士を呪って仇討ちを誓う。

一方、カスティーリヤ王国において、国王ドン・アルフォンソはリスボンから帰国したドン・ゴンサーロ・デ・ウリョアに対し、その娘ドーニャ・アーナに婿としてドン・ファン・テノーリオを世話するとの提案をする。ドン・ゴンサーロは喜んでそれを受ける。(I)

### 3 ドーニャ・アーナ

カスティーリャ王国では、ドン・ディエゴ・テノーリオが兄ドン・ペドロからの知らせによりドン・ファンが起こしたイサベラとの事件が報告される。国王は、ナポリ王に知らせた上で、セヴィーリャに戻ったドン・ファンにイサベラを娶らせ、レプリハに追放するむね宣告する。

さらにカスティーリャの宮廷に現れたオクタヴィオには、ドン・ゴンサーロの娘ドーニャ・アーナを世話することを約束する。

一方、セヴィーリャに戻ったドン・ファンは旧友モータ侯爵と会い、旧交を温める。しかしこの機会を利用してモータ宛の手紙を盗み見して、寝所に忍び込み、まんまとドーニャ・アーナを犯してしまう。さらに、娘の危急を救おうと現れたゴンサーロは、逆に殺害されてしまう。つまり旧友を欺いて、その恋人を犯した上に、その父親まで殺害するという大胆な犯行を重ねる。

さらに運悪く王宮広場に来合わせたモータ侯爵はこの惨劇の犯人としてドン・ディエゴに逮捕されてしまう。国王は翌朝にもモータを断罪せよと命じる。

### 4 アミンタ

ドン・ファンはナポリの事件で国王の不興をかい、レプリハへ追放されるが、その途路パトリシオとアミンタの婚礼の場に遭遇する。この機会を逃すドン・ファンではない。結婚式に押しかけて、貴族の称号や贅沢を餌に結婚の約束を信じさせて、結婚式を挙げたばかりの百姓娘アミンタを新郎パトリシオから奪い取ってしまう。ドン・ファンの殺し文句は次のような言葉である。

「床入りが終わっていない限りは騙されたとか意地悪だとかの理由で無効

にできる。

[……] 万が一、約束と誓いに反することがあれば、裏切りと背信の咎で私を殺すがいい。(傍白) ただし、死んだ奴がだぞ、生身の人間にやられてたまるか!

[……] ああ、愛しいアミンタ! 明日になれば、艶やかな白銀の飾りにティバル産の黄金の銚を散りばめた靴に可愛い足を乗せ、白雪のうなじを首飾りが縁どり、指には指輪が輝き、白魚のごとき指は台金にはまった極上の真珠かと思紛うほどになりますよ。」(III)

イサベラはファビオをともない、ドン・ファンを追ってセヴィーリヤをめざし、タラゴーナにいたる。途中のバレンシアでは仲間を連れた漁師娘ティスベアに会い、ドン・ファンから受けた仕打ちを聞かされる。両者は合流してセビーリヤの王宮を目指す。

さらにドン・ファンは道を進めるうちに埋葬されたドン・ゴンサーロ・ウリョアの墓に出会う。そして死人を侮辱する言辞を弄し、ドン・ゴンサーロを宿の夕食に招待する。ドン・ゴンサーロの石像はドン・ファンの宿を訪ねドン・ファン一行と夕食を共にした後、お返しに石像がドン・ファンを晚餐に招待する。

ここで国王はドン・ファンをレブリハ伯爵に任じ、イサベラをドン・ファンに娶あわせ、ドニャ・アーナを無罪放免にしたモータ侯爵に世話しようと計画する。

一方アミンタはガゼーノを伴ってドン・ファンの結婚不履行を訴えに現れるが、オクタヴィオはこれを利用して彼らを王宮に連れてゆく。

ドン・ファンは国王の仲介でイサベラに会い、結婚式を今夜にもあげよ

うと言い、イサベラのことを「まるで天使だった。色白の顔へ血のさしたところなどは、暁に緑のつばみからはじけ出るバラのようであった。」(III)と、ご機嫌である。しかしその前にドン・ゴンサーロの石像の晩餐への招待を受けて、結局石像に手を握られ業火に焼かれ死んでしまうことになる。ドン・ゴンサーロはドン・ジュアンの手を握って言う。

「貴様の追い求めてきた業火に比べれば何ほどのこともあるまい。神の不思議は計り知れぬものだ。ドン・ファン、貴様の罪を死者の手で償うよう主は望んでおられる。これこそが神の裁き、『自業自得』である。」(III)

これに対してドン・ファンは告解を求め、赦しをこうが聞き入れられない。「墓石と共にドン・ファンとドンゴンサーロが大音響もるとも沈んで行く。」(III)

最終的には国王は全てを知り、イサベラはオクタヴィオと、ドニャ・アーナはモータ侯爵と結ばれることになる。

以上、イサベラ、ティスベア、アーナ、アミンタの4人の女性被害者を中心に、物語展開をみてきた。そこで浮き彫りになったのはドン・ファンのあくなき漁色、殺人まで犯してしまう犯罪性である。またドン・ファンは、貴族の青年騎士にあるまじき卑怯な手口、友人を騙しその恋人を誑かすことまでしてのける厚顔無恥な人間として描かれた。餌食になる女性たちは、高貴な宮廷に伺候する貴族の婦人から村娘まで、貴賤、国籍、年齢を問わず全ての女性である。

下僕のカタリノンは常にドン・ファンに付き従ってドン・ファンを助け、意見をし、悪事に加担する。演劇的には下僕はコンフィダン confident（打ち明けられ役）で、舞台と観客をつなぐ役回りを果たす。また叩かれ役でもあり、常に笑いをつくり出す役割も担う。

## II. 『ドン・ジュアン』の登場人物：女性たち

『ドン・ジュアン』<sup>(1)</sup>は1666年『タルテュフ』上演禁止の穴を埋めるために急遽用意された作品とされている。1662年『女房学校』でいわゆる本格喜劇を完成させますます本格喜劇制作に意欲を燃やしていた時期である。『タルテュフ』は狂信的な宗教者を批判した問題作であったが、宗教結社の反対にあい、国王ルイ十四世も宮廷内の圧力に抗し切れずモリエールを庇護し続けることができなかった。

『ドン・ジュアン』は、この時期に書かれた本格喜劇の体裁とは異なり、5幕形式を取りつつ散文で書かれ、場所の変化、時間の経過、筋の展開など自由な形式を採用していて、原型であるティルソ的なバロック演劇の形式を保っているトラジ＝コメディである。

舞台は、古典主義形式の手法をとり、「舞台はシシリー島」<sup>(2)</sup>と指定されているが、これも表面的に形式を守っただけで、ドン・ジュアンの漁色の旅はどこに設定しても可能であったろう。しかし、ドン・ファンの出自がスペインであるから、地中海世界を想定するのはこれまでのドン・ファン像を継承する上で重要な要素と言える。つまりモリエールのドン・ジュアン像が前作の遺産を相続した上で、それを継承し、発展させているからである。

さて前述のように、『色事師』の4人の女性の犠牲者に焦点を当ててみてきたが、非常に対比的なのは、『ドン・ジュアン』においては物語の展開の中でただ一人の犠牲者も出ないのである。つまりドン・ジュアンの様々な誘惑の計画は全て失敗に終わり、むしろ滑稽な結末を展開するに過ぎない。しかし手順として女性登場人物を比較し、対応関係を確認した上でその原因を考えてみよう。

## 1 ドーナ・エルヴィール

開幕冒頭ドン・ジュアンの下僕のsganarelとエルヴィールの下僕のギスマンの対話から、これまでのドン・ジュアンの行状の経緯が明らかになる。ギスマンはドン・ジュアンを非難して言う。

「[……] おれにゃ全くわからんよ、あれほどの恋心、目にもの見せたご執心、度を超した讃辞、誓いの言葉、愛のため息、愁訴の涙、心を込めた恋の文、熱烈な愛の告白と止めどない約束、しまいにはあ、激情高じて逆上したあげく、ついには修道院の聖なるいましめを打ち破り、情のおもむくままにエルヴィールさまをものにした。それなのに、どうしてもおれにゃわからねえ。そこまでやっておきながら、どうして約束を反古にしようって言うんだい。」(I-1)

それに対してsganarelはドン・ジュアンについて次のように述べる。

「おれのご主人のドン・ジュアンさまは、この世をはばかり大悪党、狂犬の犬畜生、悪魔、トルコ人、天国も地獄も狼男も信じず、この世を

獣同然に生きる異端者、エピクロス豚、放蕩無頼の大王さまさ。[……]  
 おまえさんのご主人さまと結婚したという話だが、色恋のためならなんでもやってのけるんだ。いいかい、ご主人さまといっしょに、おまえさんだろうが、犬だろうが、猫だろうが、嫁さんにしかねない。結婚なんざあ、うちの旦那にとっちゃあなんの取り決めにもなりゃしないのだ。そんなものは、美人をものにする罠にすぎないのさ。結婚の相手は誰でもいいのだよ。貴婦人、お嬢さま、町娘、村娘、旦那にとっちゃあ熱すぎるも冷たすぎるもあつたもんじゃない。至ところで嫁にした女の名前を全部言ったら、日が暮れちゃうよ。[……]」(I-1)

これらの台詞をみると、エルヴィールの人物像は、ナポリ王国において伯父のドン・ペドロ・テノーリオがドン・フアンが行状を難詰して述べたくだりの中に出てきた女性なのである。「スペインでは貴族の女性を無法極まりない裏切りに陥れた」<sup>(3)</sup>ののだが、これがまさにドン・ジュアンを追ってスペインからたどり着いたエルヴィールと符合する。

エルヴィールは捨てられた女性で、過去の犠牲者である。その結果彼女はドン・ジュアンの不実を難詰し、いわば復縁を迫り結婚の遂行を促してきたのだ。だから妻として夫ドン・ジュアンの行状を責める。その胸中にはドン・ジュアンを心から愛しているけなげな女心がある。つまりドン・ジュアンには魅力があるのだ。しかし、ドン・ジュアンは詭弁を弄してエルヴィールを拒絶する。

「[……] [旅に出た理由は] 純粹に良心的な動機からですよ、これ以上あなたといっしょに暮らせば、罪を犯すばかりだ、と考えたためな

んです。さまざまな懸念が湧いてきて、わたしは自分のしていたことに心の目を開いたのです。あなたと結婚する目的で、わたしは修道院の垣を破って、あなたを連れ出した、あなたのほうでは誓いを破って、聖い勤めを棄てられた、だが神さまはこうした事柄にたいして、ひどく妬みぶかくていらっしゃるのだ、と、こう反省したのです。悔恨の念が胸に萌ざしました。神の怒りが恐ろしくなりました。わたしは考えました、われわれの結婚も態のよい姦通にすぎない、いつ天罰がくだるかもわからない、だから、わたしとしてはあなたを忘れるように心がけ、なんとかしてあなたをもとの勤めへお帰しするのが、いちばんではなからうかと。[……]」(I-3)

それに対して、エルヴィールも毅然と反論して、去って行く。

「[……] 気位のある人間なら、こんな話は、ひと言聞いただけで、決心をつけるものでえすわ。わたしがいま恨み言を言ったり、悪態をついたりするなどと思わないでくださいまし。いいえ、いいえ、むだな言葉で腹を立てたりするものですか、くやしい気持ちは仇討ちの日まで、そっくりそのままとっておきます。もう一度言いましょう、不実者、他人を辱めた報いには、神さまの罰がくだるもの、神さまなんか怖くないというのなら、せめて傷ついた女の執念を恐れるがいい。」(I-3)

結局、以前誑かされ棄てられたエルヴィールはドン・ジュアンに愛想をつかして去って行ったのである。

ドーナ・エルヴィールはIV幕に再度登場する。ここではドン・ジュアン

に対する愛も冷め、彼の改悛を願って訪ねてきたのだった。彼女はドン・ジュアンを正道に引き戻そうと諄々と説得する。

「あなたさまをお慕いしたよこしまな情熱も、罪ぶかい恋慕に狂う心の嵐も、この世の卑しい恋に恥ずかしいほどとり乱した気持ちも、神さまはわたしの魂からすっかり追い払ってくださいました。あなたさまにたいして、いまわたしの心に残っておりますものは、いっさいの肉のつながりから清められた胸の炎、聖らかな情け、すべてから解脱した愛、ただそれだけでございます。[……] たび重なるあなたさまのご罪過には、神さまのお情けも尽き果て、恐ろしいお怒りがいまにも頭上に落ちようとしております。それを避けたいと思し召したら、速やかに悔い改めをなさいませ。何よりも大きな不幸を免れるためには、あるいはもう一日の暇さえないかもしれませぬ。[……]」(IV-9)

しかし、ドン・ジュアンは聞く耳を持たない。それどころか喪服姿のエルヴィールに新たな情欲を感じる始末である。去っていく彼女の姿を眺めながらスガナレルに次のように打ち明ける。

「おい、俺はあの女にまたちょっとばかり未練気が出たよ、あの変わった新しさはなかなか面白い、投げやりな身なり、やつれた姿、涙のしずく、あれを見たら消えた火の燃え残りがいささかくすぶりだしたようだ。」(IV-10)

このエルヴィールこそは、前述のように、『色事師』の中で伯父のドン・

ペドロがドン・ファンを難詰して述べた「スペインで貴族の女性を無法極まりない裏切りに陥れた」女性にほかならない。そこでは姓名は明かされなかったが、モリエールはドヌ・エルヴィールとして、この人物像を『ドン・ジュアン』に登場させたのである。そのために、エルヴィールの兄弟、ドン・カルロス、ドン・アロンスはドン・ジュアンを妹の仇、家の仇として追跡することになる。

## 2 無名の許婚の女性

「結婚という神聖なる秘跡をもてあそぶ」とうるさく責め立てるスガナレルを叱りつけ、ドン・ジュアンは次なる獲物を獲得する計画を打ち明ける。

「[……] おまえに話して聞かせた女というのは、若い許嫁で、最高の美人なのだ。これから婚礼をあげようとしている当の男に連れられてこの町にやって来たのさ。偶然、恋仲のふたりが旅に出る三、四日前に知り合ったのだ。お互いにあれほど満足し合い、あふれるばかりの愛をあらわにしているふたりをこれまでみたことがないな。ふたりの互いの情熱が目に見えてやさしいものだから、おれは感動を覚えたのだ。おれは強く心を打たれ、嫉妬心から恋心が芽生えたのだよ。[……]」(I-2)

そして、小舟や人手を準備して、ふたりの舟遊びの機会を利用して許嫁を手に入れようという算段をする。しかし、突風にあおられて舟は転覆し、さんざんな結果に終る。つまり『ドン・ジュアン』においては、許嫁獲得のドン・ジュアンの作戦は突然の小舟の転覆事件によって失敗に終るのである。

いうまでもなく、この許嫁の女性は舞台に登場しないので名前は与えられていない。しかし、この女性は明らかに『色事師』のアミンタに相当する。アミンタの場合は、婚礼の直後に貴族の地位や贅沢な生活を餌に誘惑され、新郎のパトリシオから奪い取られ、その後棄てられたのであった。

### 3 シャルロットとマテユリーヌ

この水難事件で危うく死ぬところであったドン・ジュアンたちを救ったのは、折よく海辺にいた百姓のピエロたちだった。こんな災難にあってもドン・ジュアンはめげない。それどころかここで助けてくれ、介抱してくれた村娘マテユリーヌに、さらにはピエロの恋人シャルロットに目を付ける。そして、早速スガナレルに打ち明ける。

「[……] 予想もしない突風で、舟もろともおれたたちの仕組んだ計画も水の泡だな。しかし、実を言うと、さっき別れたあの百姓娘がこの不運をうめ合わせてくれるぜ。あの女にはとても魅力があるから、おれたちの計画の不首尾でこうむった不快な気持ちも心の中から消し去ってくれるというもんさ。この思いをとげにゃなるまい。[……] このもうひとりの百姓娘はどこから出てきたんだい、スガナレル？ これほどかわいい娘を見たことはあるまい？ どうだ、さっきの女よりいい女だとは思わんか？」(II-1)

そして、ピエロを脅しつけてシャルロットを口説き、次には鉢合わせになったマテユリーヌを巻き込んで、三つ巴の口説き合戦を展開する。ふたりの女に挟まれて、両側の女をそれぞれ口説き、また両側の女からそれぞれ

れ責め立てられるドン・ジュアンの姿は、滑稽な茶番劇の様相を呈している。もちろんふたりの娘を征服するには至らない。

『色事師』において、ドン・ファンはセビーリヤ王国に行く途中難破してしまい、漁師娘ティスベアとその仲間たちに助けられた。そのティスベアを誑かし、彼女を絶望の淵に突き落としたのだった。しかし、『ドン・ジュアン』においてはマテュリーヌもシャルロットも無事ドン・ジュアンの誘惑から逃れることができたのである。むしろ誘惑する百姓娘をふたりに増やして、誘惑場面をより滑稽味を帯びたパロディーに仕立てているのだ。『色事師』のドン・ファンに棄てられて、絶望に狂ったティスベアの嘆き悲しむ情景とは反対に、ドン・ジュアンとふたりの娘の掛け合いは楽しい恋の口説きの三重唱になっている。

### III. ドン・ジュアン、石像およびスガナレル

#### 1 ドン・ジュアン

モリエールの作劇法に関してはこれまで多くの批評・研究がなされてきた。1662年に発表されたいわゆる本格喜劇の第1作目『女房学校』は、女性の教育や結婚についての、いわば当時の社会問題をとりあげて、鋭い社会諷刺をおこなった作品である。当然これに対して反対派の人々は、折からのモリエールのアルマンド・ベジャールとの結婚をふまえて、モリエールを誹謗中傷し、いわゆる『『女房学校』論争』が起り、激しい応酬がなされた。このような問題劇を風俗喜劇とし、その中の登場人物は極端に誇張された典型人物として提示されるのだが、そのような人物像を描いた喜劇は性格喜劇とされた。『女房学校』の主人公アルノルフはまさにこれに当たる。

修道院から連れてきた無垢の娘アニェスを自分の理想の妻に教育しようという、何とも奇妙な、涙ぐましい中年男の妄執が展開される。勿論、終幕ではアルノルフのもくろみは破れ、アニェスは若者オラースと結ばれて若者の勝利で終る。さて、このアルノルフとはどのような人物か。先行作品『スガナレル』や『亭主学校』に登場するスガナレルの系列<sup>(1)</sup>に属す人物であるが、コキユ妄想狂とでもいうべき人物である。『スガナレル』の副題が「疑い深い亭主」*Cocu imaginaire* であるように、アルノルフはスガナレルを誇張し発展させた人物像と見なすことができる。つまり、コキユ妄想病患者なのだ。

性格喜劇といわれる作品の登場人物たち、『タルテュフ』のオルゴン、『ル・ミザントロープ』のアルセスト、『守銭奴』のアルノルフ、『女学者』のフィラマント、『病は気から』のアルガンなど、全て変人をとおり超えて病人なのだ。しかも極端に誇張された偏執狂的性格の病人なのである。

それではドン・ジュアンはいかなる性格の人物か。すでに見てきたように、『色事師』のドン・ファンは漁色病患者であり、殺人者である。そのドン・ファンの性格を引き継ぎながら、女性征服の点では全て不首尾に終りながら、新たな性格を与えられて輝きをます。女性征服の場面は、むしろ滑稽な、あるいは微笑ましい、あるいは惨めな情景に変わってしまい、その本来のドン・ファンの漁色家、色事師としての面影はない。モリエールがドン・ファンに付加したドン・ジュアンの性格は、唯物論者（森の中の場面 [III-1]）、無神論者（いわゆる貧者の場面 [III-2]）、義侠心に富んだ騎士（盗賊の場面 [III-3、4]）、商人を食い物にする没落貴族（商人ディマンシュ氏の場面 [IV-2]）、父親の真心をもてあそぶ偽善者（父親ドン・ルイの場面 [V-1]）などの実に複雑な性格なのだ。単なる漁色家だったドン・ジュアンは

17世紀フランス貴族社会に跋扈していたさまざまな人間像を肉付けされることになったのである。このような複雑な性格を与えられたドン・ジュアンは、今後さらにさまざまな作家たちによってさまざまな時代に、各国において、新しい顔をもったドン・ジュアンとして生き続けることになる。

## 2 石像

このドン・ジュアンを死に導くのは石像であるが、『色事師』の石像がドン・ゴンサーロ・デ・ウリョアであったものが、『ドン・ジュアン』においては、昔ドン・ジュアンが決闘で倒した騎士団長の石像である。これも誘惑された多くの女性たちの話と同様に、舞台上では展開されなかったドン・ジュアンの過去の所行なのである。いずれにしても、ドン・ジュアンは石像によって地獄に墮とされる。終幕でドン・ジュアンが地獄に墮ちるのは運命なのであるが、それを遂行させるのがデウス・エックス・マキナ Deus ex machina としての石像である。また亡霊も登場して、神の力を誇示し、このトラジ=コメディの終幕を迎える。

ただし、『色事師』のドン・ファンは石像に対して「告解をしたい、赦しを与えてくれる者を呼んでくれ。」と、訴えるが、聞き入れられない。一方それとは反対に、ドン・ジュアンは剣をとって亡霊に立ち向かい、「いや、いや、何が起ろうと、おれが悔悛するなんてことがあるもんか。さあ、ついてまいれ。」(V-5)と言ってスガナレルを促す。そして、ドン・ジュアンは一貫して神を恐れず死んでいく。

石像の出現と地獄の業火は、当時の舞台演出上大きな魅力だった。大きな石像が舞台上を動き、口を空けた地獄に火柱とともにドン・ジュアンを道ずれに消えて行く石像の姿は、当時の観客にとっては印象深い情景であ

ったに違いない。現代の演出でもさまざまな試みがなされている。<sup>(2)</sup>

### 3 スガナレル

最後に下僕スガナレルについてふれねばならない。前述したように、下僕は「打ち明けられ役」として演劇的に重要な役割を果たし、しばしば作者の代弁者の役割をも努める。しかも、スガナレルという人物は、モリエールの演じる他の作品にも登場する人物であり、亭主として、下僕として活躍する。作家であり、役者であったモリエールにとって、スガナレルはますます重要な役回りになってくる。勢い台詞も長いし、常にドン・ジュアンに付き添って、口論し、反論し、愚痴をこぼし、笑いを作り、下僕の身分を嘆く。一方、『色事師』のカタリノンは、同じようにラツィ lazzi を演じ、笑いを作り、ドン・ファンを補佐して活躍するが、スガナレルにはおよばない。やはり、ドン・ジュアン同様、スガナレルも大きく変貌したと言えよう。

### おわりに

『色事師』に登場する4人の女性の犠牲者、イサベラ、ティスベア、ドニャ・アーナおよびアミンタと『ドン・ジュアン』に登場する女性たちドヌ・エルヴィール、許嫁の娘、およびシャルロットとマテურიヌを、その人物像の性格継承面を中心に検討してきたが、それぞれ身分や状況を継承しているものの、最大の特徴は『ドン・ジュアン』においては新たな女性の犠牲者は誰ひとりとしていなかったことである。ドン・ジュアンの女性誘惑の場面は、無様な失敗に終るか、むしろ滑稽な楽しい場面として提示され、女性の誘惑は全て不成功に終わったのである。

ドン・ジュアンは、過去のドン・ファンDon Juanの性格、漁色癖と殺人までも犯す大胆な性格を受け継ぎ、さらに当代の貴族社会に跋扈していたさまざまな人物、唯物論者、無神論者、義侠心のある騎士、没落貴族、偽善者などの性格を与えられ、奇怪な人物に変貌したのである。これは登場人物の性格を誇張することによって典型人物を塑造するモリエールの人物生成の手法であった。

ドン・ジュアンは、これ以後各国において、各時代にそれぞれの文芸主潮にのって、さまざまな顔をもった人物として登場することになる。漁色家のドン・ファンとしてスペインを出発して、モリエールによってさまざまな顔をもったドン・ジュアンが塑造され、それがさらに各国に行って変貌を遂げていくことになる。

それに伴って、下僕として常にドン・ジュアンに付き添うスガナレルは、カタリノンの役割をはるかに超えた活躍を見せる。スガナレルはモリエールがもともと自分自身が演ずるために造り出した人物、ある時は町人・亭主であり、ある時は下僕でもある人物像なのだ。当然、スガナレルの舞台上での役割は大きく、舞台と観客をつなぐコンフィダンの役割はもちろんのこと、笑いや、諷刺を作り出す重要な役回りを担う。亭主または下僕としてのスガナレルは俳優モリエールの分身であり、代弁者なのである。スガナレルもまた様々な主役に変身していく。

## 注

はじめに

- (1) Boileau, *Œuvres de Boileau, L'Art poétique*, Edition de Georges Mongrédien,

- Editions Garnier Frères, 1961, p.172.
- (2) Corneille, *Edipe* (1659), Racine, *Phèdre* (1677): コルネーユはエディップの妹に デイルセ Dircé 姫を配し、ラシーヌはイポリットの恋人にアリシイ Aricie 姫を配した。
  - (3) Plautus, *Amphitruo*, *Aulularia*.
  - (4) Tirso de Molina, *El Burlador de Sevilla y Convidado de Piedra* (1625?). 翻訳には、Pierre Guenoun, *L'Abuseur de Séville et l'Invité de Pierre*, Aubier-Flammarion, 1968, Paris、大島正『ドン・ホアンの原型の研究』、白水社、1966、岩根圀和『セビーリヤの色事師と石の招客』（『スペイン中世・黄金世紀文学選集 7、バロック演劇名作集』）、国書刊行会、1994、等を参照した。翻訳、引用には主に岩根圀和氏の翻訳を拝借し、文脈に合わせて適宜改変した。
  - (5) Gendarme de Bévoite, *Le Festin de Pierre avant Molière*, Slatkine Reprints, Genève, 1978. Nicolas Drouin dit Dorimon, *Théâtre*, textes par Mariangela Mazzocchi Doglio, Schena-Nizet, Paris, 1992.
  - (6) Gendarme de Bévoite, *La Légende de Don Juan, Son Evolution dans la Littérature des origines au romantisme*, Slatkine Reprints, Genève, 1993.
  - (7) Lorenzo da Ponte, *Don Giovanni* (1787), textes par Jean Massin, Editions Complexe, Bruxelles, 1993, pp.207–271.

#### I. 『色事師』の登場人物

- (1) 岩根圀和, 上掲書、p.312。
- (2) 下線部(筆者)は、後述の「『ドン・ジュアン』の登場人物：女性たち」の「1 ドーヌ・エルヴィール」の節で引用する部分。
- (3) スペイン劇の幕割りは、フランス古典劇と異なり、場面の展開が非常に自由に進行する。便宜的に(翻訳に従って)3幕になっているが、第1日 (Jornada primera) から第3日 (Jornada tercera) に別れていて、その中で場面が次々に変わる。ここでは幕数をローマ数字で示す。

#### II. 『ドン・ジュアン』の登場人物たち：女性たち

- (1) Molière, *Œuvres complètes de Molière, Tome I*, Edition de Robert Jouanny, Editions Garnier Frères, Paris, 1962. *Dom Juan*, pp. 707-776.

訳文は拙訳『ドン・ジュアン』、『ベスト・プレイズ』、相田書房、2009. pp. 258-302. を用い、鈴木力衛訳『ドン・ジュアン』、岩波書店、1977を参照、拝借した。引用は (I-1) [I 幕 I 景] と記す。

- (2) *Ibid.*, p.714.
- (3) I. の注(2)を参照。

### III. ドン・シュアン、石像およびスガナレル

- (1) 拙論『スガナレルの系譜』弘前大学教養部『文化紀要』第12号II、1977, pp.103-127。
- (2) 動く石像や地獄の業火は、当時流行の「仕掛け芝居」comédie à machines として人気があった。石像は亡霊とともに、このトラジ=コメディに終幕をもたらすデウス・エックス・マキナの役割を果す。筆者の観劇体験では、1995年の改修なったコメディ=フランセーズのジャック・ラサル Jacques Lassalle 演出の『ドン・ジュアン』の幕切れや、同年のポール・エリュアール劇場のパトリス・ビジェル Patrice Bigel 演出の『ドン・ジュアン』の終幕が特に印象に残る。

(本稿は、科学研究費補助金による共同研究「多メディアにおける「らしさ」の変容—表象文化にとって「自然さ」とは何か—」[基盤研究(C) 課題番号 20520131 研究大表：北山研二]の研究成果の一部である。)